

中国人キリスト者の「訳語論争」への参加

金 香 花

1、はじめに

19世紀プロテスタント宣教初期、聖書の中国語訳の中で起きた「訳語論争」、即ちキリスト教の神を「神」に翻訳するか、それとも「上帝」に翻訳するかは、1919年に「官話和合本」が「神」版と「上帝」版¹に同時に出版されるまで続いた。専門用語「用語問題(Term Question)」として知られているこの論争は、それだけ長い時間がかかってもお互いに各自の主張を譲れなかったのは、各自にとって重大な意味を持つものがあったからである。それはキリスト教の真理の核心概念である神概念を表現する訳語だからである。「真理」は絶対的であり、唯一である。真理は妥協を許さない。しかしそれと同時に、「真理」は地の果てまで伝わらないといけない。「キリスト教の神の絶対性」とそれを「受容者に伝わるように伝える」のは、プロテスタントにおいて同様に重要である。

訳語論争の両側の対立する立場を極端に短縮するなら以下のように言える²。ヘブライ語のエロヒムとギリシア語のテオスが、最高者としての神を表現すると同時にあらゆる礼拝対象をも表現するので、このような二つの意味を同時に表現できる中国語で翻訳することを目指す。しかし、中国語の中にはこのような表現が見つからない。そこで、中国語の中で最高者を表現する「上帝」を主張する考えと、あらゆる礼拝対象を包括的に表現する一般名詞である「神」を主張する考えに別れたのである。「上帝」が異教徒の国である中国で崇拝されている対象であるがために、この用語の使用は偶像崇拝の可能性を含んでいる。ゆえに「神」の使用は、キリスト教の神概念を偶像崇拝から守ることができるという。反対に、「神」はあらゆる崇拝対象を指しているため、最高者であるキリスト教の神を表現するにはふさわしくない。受容者たちがこの用語を聞いても、唯一で最高の存在を充分理解することができない。ゆえに、「上帝」の使用は、受容者たちがキリスト教の神を容易に理解することを可能にするという。このような意味で、「神」は原文³の正確な意味を強調し、「上帝」

¹ God が「神」に翻訳された聖書と「上帝」に翻訳された聖書。

² Chinese Repository Vol.XVII.—October,1848.—No.10 p491 W.H.Medhurst.と Chinese Repository Vol.XVII.—February,1848.—No.2 p68 William J.Boone.の内容を参照。

³ 聖書の新しい写本の発掘に伴い、最初に書かれた文章という意味での原文を確定できない。そ

は受容者たちに伝わるように伝えることを強調したと言える。

聖書翻訳に於いては、聖書原文と翻訳者である宣教師しか登場しないため、受容者はあたかも肝要な要素でないかのように取り扱われやすい。しかし、翻訳された聖書がキリスト教の神に関して聞いたこのない人たちの前に置かれ、それを通してキリスト教の神を伝えようとするときに、聖書原文と翻訳者は姿を消し、聖書の訳文にすべてをゆだねるしかない。この時になって始めて、翻訳における受容者の重要性が最前面に現れるのである。翻訳された聖書、翻訳された用語への理解を通して、キリスト者に改宗させるのが、宣教師たちにとって結局の目的であるからである。

訳語論争自体は、宣教師の間の論争であるが、1877 年から 1878 年の間に『万国公報』では、中国人キリスト者たちを呼びかけ、この論争への意見をまとめていた記録が残っている。

受容者の重要性を考えると、この資料の重要性が一層増すのである。訳語論争の中で、宣教師たちの考慮対象であった受容者が直接に訳語に対して発言をするなら、どのような様子で現れるのか。

伝える方である宣教師たちとは異なる背景を持っている中国人キリスト者、すなわち受容者側に焦点を合わせるときに、この論争に対して、少し違う側面から考えることができるのではないと思われる。中国人キリスト者たちが宣教師と全く新しい意見を出したわけではないが、このような意見を支える背景的な考え方には違いが見える。

本稿では、まず訳語論争の歴史を簡単に概観する。それから、中国人キリスト者たちによる論争の中で論じられた論点を確認する。また訳語論争全体を考慮しながら論じるを試みる。

2、God の訳語論争の歴史

訳語論争に関する断片的な研究には、赵维本の《中文圣经译名争论初探：神乎？帝乎？》、吴义雄の《译名之争与早期的〈圣经〉中译》、伊爱莲の《争论不休的译名问题》と李家驹の《一场“神”或“上帝”的争论—早期来华新教教士对于“God”一词的翻译与解释（一八〇七年至一八七七年）》などがあり、訳語論争歴史の全体像を最も完全に描こうとした研究には程小娟の『God 的汉译史—争论、接受与启示』がある。

まずは、程小娟により、訳語論争の歴史全体を簡単に概観することにする⁴。

明末清初カトリックでの訳語論争

中国語でキリスト教の神の訳語に関する論争が始まったのは明末のイエズス会士の間であ

れ故、聖書翻訳に於いて、本当の意味での「原文」はいまだ存在しない。ただ、本稿に於いては、翻訳行為が始まるときに、翻訳の起点テキストという意味において原文という用語を使用する。

⁴ 程小娟『God 的汉译史：争论、接受与启示』社会科学文献出版社、2013.

った。争点は、Deus を「天」「上帝」(マテオ・リッチ利瑪竇 Matteo Ricci)に翻訳するかそれとも「天主」(罗明坚 Michele Ruggleri)で翻訳するかであった。17 世紀に入り、1610 年ごろからは訳語に対する文章としての論争が浮かびあがり始め、さらに 1630 年代からは「典礼問題」(礼仪之争)に伴い、修道会間の争いに展開した。1707 年に「南京教令」が出され、1715 年と 1742 年に二度教皇により申述され、最後は中国の典礼問題への論争が禁止され、「天主」をもって Deus を翻訳することにした。

カトリックでのこの訳語論争は外的な権威により強制的に「天主」に終着され、十分な論争ができなかった。しかし、ここで提示された問題と論証、特に「上帝」と「天」に対する基本的な観点は、すでに訳語論争の核心的な争点に触れていた。この争点は、プロテスタント宣教師たちが注目した焦点の一つであり、またプロテスタント宣教師たちが訳語を選択する際に影響を与える要素になる。

初期プロテスタントにおける訳語論争

1822 年に出版されたマーシュマン(Joshua Marshaman)と助手ラーサ(John Lassar)による中国語訳聖書と 1823 年にモリソンとミルンが翻訳した『神天聖書』は、両方ともバセ(Jean Basset)訳を参照にしているが、両方とも God を「神」に訳している。しかし、モリソンは「神」だけを God の唯一の訳語として執着しなかった。ミルンは 19 世紀 20 年代から「神」に反対し、「上帝」を使用し始めた。

メドハースト、ヨハネ・モリソン(モリソンの息子)、ギュッツラフとブリッジマンが『神天聖書』の改訳を行い、1836 年に新約(『新遺詔圣书』)を、1838 年に旧約(『旧遺詔圣书』)を出版した。その旧約(『旧遺詔圣书』)では、God を「上帝」に翻訳した。

1834 年に、中国のプロテスタント宣教師たちが香港に集まり、権威性を持ち中国で通用する訳本を訳すことを提案した。この会議から、「上帝」と「神」の訳語への分裂が大きくなり始めた。宣教師たちは God の訳語研究に集中し、『中国丛报』(Chinese Repository)に文章を載せ、論争が展開した。

1847 年、第二回の聖書翻訳会議が上海で開かれ、より多くの宣教師たちの参加により、論争は頂点に達した。しかし、論争は解決できず、委員会はこの問題をイギリス聖書公会とアメリカ聖書公会に委ねられた。イギリス聖書公会は「上帝」を、アメリカ聖書公会は「神」を使用することを各自に主張した。改訳聖書の出版を妨げないため、出版された聖書に空白を残し、宣教師たち自分で各自が主張する訳語を書くようにした。

論争は 50 年代前半期に頂点に達し、50 年代後期から 70 年代初期までは段々静まっていた。

1877 年中国でのプロテスタント宣教師大会前後の訳語論争

一時的に静まっていた論争がもう一度浮かんできたのは、1877 年第一回中国プロテスタ

ント宣教師全国大会が行われる直前であった。プロジェクト(H.Blodget)が1875年1～2月の「宣教師ニュース」(Missionary News)で公の手紙を書き、訳語論争は宣教師大会で避けようと呼びかけたことが、訳語論争をもう一度思い出させることになった。『教务杂志』(The Chinese Recorder)には論争の文章が次々掲載された。大会では、専門的な委員会を任命し、訳語問題を論じることにしたが、何の成果も得られなかった。論争はもう一度激しく行われ、解決の見込みはなく、逆に宣教師たちの間に不和をもたらした。1878年1～2月の中の一期では強制的にこの論争を停止させるような文章が載せられ、論争が冷却された。

1890年中国プロテスタント宣教師大会前後の訳語論争

1890年宣教師大会の前に、訳語問題を解決する意見と方法を提案した宣教師たちがいたが、前ほどは激しくなかった。論争の場は『教务杂志』(The Chinese recorder and missionary journal)であったが、今回の論争の着目点は、今まで多様に存在してきた訳語(“天主”、“上帝”、“神”、“真神”、“老天爷”)を統一することであった。注目すべきことは、今回の会議で論争が最も多かったのは訳本の注釈問題であったことである。多くの宣教師たちは、一回限りの翻訳では聖書の意味を正確に伝えることができない、という翻訳の限界を認識した。解釈は有効な補助方法として挙げられた。

宣教師大会の後、『教务杂志』には毎年に訳語問題に関する文章が載せられていた。しかし、宣教師たちが注目したのは、問題の是非ではなく問題に取り組む態度の調和であった。1919年以降は、『教务杂志』で訳語論争に関する文章を見ることがほとんどできなくなった。

3、中国人キリスト者の訳語論争への参加

その歴史の中でも、本稿で注目したいのは、1870年代の論争である。このときの論争は他の時期と同様、主に宣教師たちの間でなされていたが、大きな特徴として、中国人キリスト者(native christian/chinaman)への考慮の必要性が議論されたことがあげられる⁵。

1877年7月21日の『万国公报』には、編集者の立場からキリスト教の神を中国語で「上帝」に翻訳すべきかそれとも「神」に訳すべきかに対し、読者が議論するように呼びかけた文章が載っている⁶。それに応じて、中国人キリスト者たちは多数の文章を投稿し、各自の意見を述べはじめ、一年間の間、論争がなされた。

この論争の宣教師側に立っているのはほとんど陸佩(J.S.Roberts)一人であったために、この論争を宣教師全体と中国人キリスト者の間の論争として見ることはできない。しかし、中国人キリスト者たちがキリスト教の神の訳語に関してどのように考えたのかを考察するには、非常に重要な資料である。

⁵ 1875年から1877までに、『教务雜誌』に掲載された訳語論争に関する文章を参照。

⁶ 陸佩,「圣号论列言」,『万国公報』(六)(第448卷,1877年、7月21日)林樂知主編,台北:華文書局,1968年.9, 675頁。

3-1、陸佩と中国人キリスト者の間の問題意識へのずれ

論争のはじめから、陸佩と中国人キリスト者たちの間には、この問題に対する根底的な取り組み方からお互いに異なっていた。陸佩が中国人キリスト者たちに求めたのは、「God の中国語訳として『上帝』と『神』のどちらがよりふさわしいのか」への議論であり、「キリスト教の神をどのような中国語で翻訳すべきか」ではなかった。陸佩のこのような議論の範囲設定は、彼が中国人に議論を呼びかける前に既に紹介したように、宣教師の間で長い年月をわたってなされてきた議論を背景にする。宣教師たちの中では、さまざまな訳語が試され、最も有力な候補として上がったのがこの二つの単語であった。陸佩は、この二つの単語を取り上げてはいるが、実際のところ God の訳語として「神」を主張し、「上帝」をエホバの訳語として見ていた⁷。そのため、陸佩がこの論争で述べている観点は、宣教師全体を代弁することはできない。本稿では「原文の表現形式を強く主張する宣教師」と呼びたい。彼は次の8つの設問を提示する。

- 「一、 昔拝した上帝は万有を創造した主なのか？黄君の論から見ると、違うようである。
- 一、 帝と上帝はどう理解すべきか？
- 一、 古代で言う上帝は一人を指すのか、それとも一類を指すのか？
- 一、 神という字はどのように解すべきか？
- 一、 神は一人を指すのか、それとも一類を指すのか？
- 一、 上帝を神の一類に帰させることはできるのか？
- 一、 人の身が無形不滅なる者を神と称することができるのか？もしできるなら、その理由を言おう。
- 一、 霊はどのように解すべきなのか？人の身体が減しないのを言い、あるいは一文字を加え万有の主を言うのか。これらを一つの霊だといえるのか」⁸

陸佩の問題設定には大きく二つの内容が含まれている。一つは Elohim と Theos を中国語に翻訳するなら、「神」と「上帝」の中でどちらのほうが相応しいのかであり、もう一つは Pneuma を「霊」に翻訳するかそれとも「神」に翻訳するかである。宣教師たちの間でこの二つの訳語に対する議論があったが、中国人キリスト者たちに、この問題に関して論じ、宣教師間の議論に対して是非の判断を下すことを要請した⁹。しかし、中国人キリスト者たちは Pneuma の訳語には関心を見せず、主に、Elohim、Theos の訳語に集中して文章が書かれていた。本論においてもキリスト教の神の訳語に集中して論じることを目的とするため、

⁷ John S. Roberts, 'Some General Principles for guidance in translating the S.S Terms for "God"', *The Chinese recorder and missionary journal* Shanghai : American Presbyterian Mission Press, P136.

⁸ 陸佩, 「圣号论列言」, 『万国公報』(六)(第448巻, 1877年、7月21日) 675~676頁。

Pneuma に関する内容は言及しないことにする。更に、Elohim と Theos の翻訳に対する設問は、キリスト教の神の訳語に対して彼が既に持っている考えがそのまま表現されている。まず彼は、中国で昔礼拝された「上帝」が創造主であることを第一問で否定している。その上で、「上帝」と「神」が中国語において「一人」を指すのか、それとも「一類」を指すのかを問う。なぜなら、陸は Elohim と Theos が唯一の存在を表現すると同時に、崇拝されるあらゆる対象をも指すのが聖書原文での使い方だと言う立場に立っている¹⁰からである。原文の言語表現の特徴が基準になっている以上、受容言語である中国語は従属的な位置に置かれる以外の可能性は期待しにくい。

陸佩が直接に述べているように、この論争は宣教師たちの間で長い間行われた訳語論争の延長線上に位置付けることができる。陸は西洋の宣教師たちの中で「上帝」に翻訳することを主張する一派と、「神」に翻訳することを主張する一派があると言う¹¹。そこで中国人各位に、宣教師間の議論の是非を論じることを勧める¹²。

しかし、中国人キリスト者たちの論点は、最初は「どのような中国語がキリスト教の神を表現するのによりふさわしいのか」あるいは「どのような中国語でキリスト教の神を表現したほうがより納得できるのか」であった。最初に文章を書いた黄品三は「造化主」を主張する¹³など、「上帝」と「神」に限定されなかった。それは、黄が宣教師たちによる訳語論争を全く知らなかったからではない。むしろ彼は、キリスト教の神の訳語として「上帝」と「神」が存在するのを指摘した上で、「独一の聖号のために中国語でその意味にふさわしいものを選ぶのは、実に難しい。神あるいは上帝と呼ぶのは、仕方がないからである」¹⁴と言っている。「造化主」は、彼なりに熟考してから提案したものだと言えよう。しかし、陸佩が議論の範囲を限定する文章を繰り返して載せたためか、中国人キリスト者たちの後の文章は「上帝」を主張する文章が絶対部分を占めている。

このような陸佩と中国人キリスト者の間の問題意識のずれは、最初からこの論争の特徴を明確にしている。すなわち、中国人キリスト者の意見が宣教師、もっと正確に言えば、「神」を Elohim to Theos の訳語として主張するアメリカ人宣教師が与えた枠の中でしか述べることができないことである。しかし、それは結果的に、この論争を訳語論争の延長線上に置かれることを可能にしたとも言えよう。

しかし、黄品三の「造化主」の抹殺からわかるように、中国人キリスト者のもっとも率直な考えを聞くことを不可能にしてしまったことも事実である。それだけではなく、陸があたかも「神」を主張する根拠が絶対的に正しい基準であるかのような発言は、中国人キリスト

⁹ 陸佩,「圣号论列言」,『万国公報』(六)(第 448 卷, 1877 年、7 月 21 日) 675 頁。

¹⁰ 同上。

¹¹ 同上。

¹² 同上。

¹³ 黄品三,「圣号论」,『万国公報』(六)(第 448 卷, 1877 年、7 月 21 日), 674 頁。

¹⁴ 同上。

者たちの激しい反論を招いた。論争全体に渡り、論争の内容と同時に、論争に取り組む陸佩の態度を批判した内容も少なくない。

「陸は聖号を考証させるために人を呼びかけたなら、言いたいことを言わせ、『上帝』の説を主張する者が文献を引用しその説を証明し、『神』を主張する者が文献を引用しその説を証明するようにしたほうがいいのではないか。陸は局外でその二説の得失を観察すべきであり、先入観が入った意見を持つてはならない」¹⁵。

制限は受けたものの、「万国公報」でのこの論争は、訳語論争に対して中国人キリスト者たちがどのように考えたのかを考察するには、非常に貴重な資料であることには変わりがない。また、この貴重な資料が残されたのは、宣教師が主催した雑誌投稿の形をとったからであるのも認めるべきことである。

3-2、中国人キリスト者が上帝を主張する理由

中国人キリスト者たちの文章を読むと、「上帝」が選ばれた最も大きな理由としては、「上帝」が「至尊者」、「独一無二の存在」「主宰者」を表現していることだと思われる。

「我が主の名前は博大であり、民はそれと呼ぶことができない。呼ぶことができないけれど強いて呼ぼうとしたら、至尊者で呼ぶべきである」¹⁶。

「耶和華は、吾が教で尊敬する、あらゆる生物を造り、万物を統治管理し、最高で無二な天地の大主宰者である」¹⁷。

彼らが宣教師たちの教えを通して理解したキリスト教の神は、最高の存在であり、独一無二の存在であった。このような存在を中国語で表現するなら、神と上帝から選択すると、「上帝」の方がよりふさわしい。

中国人キリスト者たちのこのような観点に対して陸佩は、議論してほしいのは、「最高者」をどのように表現するかではなく、God の翻訳の問題であることを繰り返して強調する。

「余が会友に論じてもらいたい題目は、独一無二の奥意ではない。…会友が論じるべきは、エロヒム (Elohim) とデオス (Deus) が『聖書』でどのように翻訳すべきかである。」¹⁸。

¹⁵ 王献吁、「拟阅何玉泉先生『天道合参』并陆佩先生书后论」、『万国公報』(七)(第471卷, 1878年、1月12日), 296頁。

¹⁶ 宣道子,「圣号论」,『万国公報』(七)(第475卷, 1878年、2月9日), 341頁。

¹⁷ 津门张逢源字金生,「圣号辩」,『万国公報』第483卷, 1878年、4月6日, 450頁。

¹⁸ 陆佩,「书《圣号论》后」,『万国公報』(七)(第456卷, 1877年、9月22日), 76頁。

原文を強く主張する宣教師¹⁹と中国人キリスト者一原文主義翻訳者と読者一の間には翻訳に対する基本的な認識からずれが存在していた。このようなずれは、原文側の翻訳者が翻訳するときの意図とその訳文を読んでいる読者(受容者)の間の違いとしても見ることができる。原文側の翻訳者の関心は、どのような訳語が原文の意味を正しく伝えるかだけに焦点を置いているのに対して、読者(受容者)は、その訳語を通して原文に接近できるのかどうかに関心が置いてある。

中国人受容者たちは、何よりも「最高者」「主宰者」という、God が指し示す指示対象に関心があり、彼らが理解した指示対象をどのような中国語という言葉で表現したらより伝わるのかを考えていた。それに対して、陆佩は原文での言語形式に重点を置いている。陆佩が提出した第三と第五の設問にも反映されているように、彼は Elohim と Theos が唯一者とあらゆる礼拝対象を同時に表現していることを強調する。

「以上の前二句(Elohim と Theos)は、独一の造化主を指して言うだけではなく、真か偽かを問わずあらゆる崇拝の類を称すことができる。これは聖書原文で使用された意味である」²⁰。

また、イギリスやアメリカでは God、すなわち「崇拝対象の一類を指す言葉」を使用しているため、中国でもその先例に従うことを勧める²¹。

このような原文形式の特徴に対して、中国人受容者たちは陆佩が強調しているように関心を持たないだけではなく、逆に、それが意味内容を理解することに障碍を感じたのである。

「華人は愚かで、他国の言葉をわからない。その翻訳可能かどうかを聞く必要がない。ただ聖教が華の邦に伝播され、華人が救われることを望むのみ」²²。

中国人キリスト者たちからすると、キリスト教の神はまず最高者であり独一無二の存在であった。このような特徴はキリスト教の神への完全な理解ではないかもしれないが、キリスト教の神への知識が少なかった当時の中国人にとっては、最も接近しやすかった。ある一つの特徴しか表現できない用語は確かにキリスト教の神それ自体を表現することができないかもしれない。しかし、接近する切り口としては最も受け入れやすかっただろう。

¹⁹ 1870年代の宣教師間の論争でも、原文を強く主張する宣教師たちと、キリスト教を全く知らない中国人を相手にしていることを意識している宣教師に分けられる。『教務杂志』(The Chinese recorder and missionary journey)の1875年から1877年の訳語論争に対する文章を参照。

²⁰ 陆佩,「圣号论列言」,『万国公報』(六)(第448卷,1877年、7月21日)675頁。

²¹ 陆佩,「圣号论列言之原意」,『万国公報』(六)(第451卷,1877年、8月11日)4頁。

²² 英绍古,「谢陆佩先生启」『万国公報』(六)(第473卷,1878年、1月19日)4568頁(page missing)。李炽昌主编,『圣号论衡:晚清《万国公报》基督教"圣号论争"文献汇编』上海古籍出版社,2008年、102頁。

このような特徴を表現できる最も受け入れやすい中国語なら、「上帝」が上げられる。最高者を表現する「上帝」と比較的に、彼らが「神」にキリスト教の訳語としての好感を持たなかったのは、彼らが理解した中国語の言葉「神」が指し示す対象があまりにも多く、また混雑しているため、唯一者、最高者、全知全能者というイメージとはほど遠かったからである。「神」はその意味が余りにも広く、まだキリスト教の神への知識が少なかった当時の中国人に対しては、「神」を通してキリスト教の神へ到達するには、難しいところがあっただろう。

「中華において神でないものがない。例えば、宅神、門神、井戸の神、このような呼び名は数えきれない」²³。

「また、神には異なる種類がある。善いものも悪しきものも[神と]呼ぶことができる、故に[神で呼ばれた]その名は軽い」²⁴。

キリスト教の神のためにどのような訳語を採用するのかは、論理的にどのような議論がより説得力があるのかだけでは収まらない。それは宣教という実践現場において、訳語としての機能をしっかり果たせるかどうかの問題である。この点は、同じ時期に宣教師間で行われた論争の中に現れている。

「私はその偉大な名前に『神』を最善の用語として受け入れることができない。異教の聴衆に説教をするとき、『上帝』を使うときのように私が言っていることを理解させることができない」²⁵。

「上帝」を主張する宣教師たちの文章には、中国人キリスト者たちの理解を重要視した特徴が見える。彼らの文章の中には、「経験」「実践」という言葉が頻繁に出てくる。聖書あるいはキリスト教の神を中国人に伝える宣教現場において、宣教師たちがキリスト教の神を伝えようとしても、受容者である中国人たちが理解できない言葉で語っても伝わらない。「伝える」と必ず「伝わる」とは言えない。「伝える」のは宣教師であっても、受容者が理解しないと「伝わら」ない。受容者の関与は、聖書翻訳においては肝要な側面であり、あってもなくてもいいような要素ではない。もし翻訳者自身が満足するために、あるいは原著者が望むだけの目的で翻訳するならば、伝わらなくても構わないかもしれない。しかし聖書は、それを読んだ読者が聖書を読むことを通して、あるいはキリスト教の神を理解しようと努力す

²³ 鹭江氏、「天道探本」『万国公報』(八) (第478巻, 1878年、3月2日), 383頁。

²⁴ 宣道子、「圣号论」,『万国公報』(七) (第475巻, 1878年、2月9日), 341頁。

²⁵ Enquirer, 'On the Terms for "God" and "Spirit"', *The Chinese recorder and missionary journal* 1876, July-August. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, P295.

ることによって、読者自身の生に変化を起させることが望まれているのである。キリスト教における「救済」が起させることが望まれるのである。そのために、ダグラスは「クリスチャン文献」と「説教」という特性を明白に強要するのである。彼らにとって、「経験は理論化より一層価値がある」²⁶のである。

陸と中国人キリスト者の間のこの激しい対立は、訳語論争自体が含んでいる最も核心的な対立だと言えよう。「原文の正確な意味」と「読者に伝わるように伝える」ことの対立である。しかし、この両者は聖書翻訳自体が含んでいる両側面ではあるが、その対立的な関係は必ずしも聖書翻訳が最初から内包していたものであるとは言えない。

3-3、中国の書き言葉が反映する古典への理解を通した「上帝」理解

「上帝」と「神」へのこのような理解は、当然でありながら、中国語での理解である。「中国語」をどのように理解するのかは大きな問題である。なぜなら、清の時代に使用された書き言葉と話し言葉には大きな違いがあったからである²⁷。「上帝」と「神」への主張と批判の根拠として主に使用されたのは中国の古典であった。中国古典としては六経が引用されている。このような古典は儒教の古典であり、そのため、この論争で主張と批判の根拠にされている「中国語」は儒教の思想がその意味に反映されている書き言葉であった。

ナイダによると、書き言葉は大きく二つに分けることができ²⁸。一つは、「古い書き言葉の伝統もあり、かなり定着した書き言葉の文体を持つ言語」であり、もう一つは、「書き言葉の歴史が比較的新しい」言語である。このような区分によると、中国語は第一の場合に当てはまる。ナイダは、「比較的原文ママ古く文字の伝統を持つ言語圏の社会の中で、翻訳をする際²⁹」、話し言葉と書き言葉の区別と、理解用言語と発表用言語との区別を用いて説明する必要があると考える³⁰。

書き言葉に含意されている儒教的思想は、原文を強く主張する宣教師たちにとっては、中国語という言葉の意味にとどまっていた。中国の宗教思想として理解されていたとしても、キリスト教の神の前では、その存在が徹底的に否定されるべきものであった。陸佩の観点に限って言うと、上帝は異教の国で異邦人である中国人たちが拝んでいる神であるため、偽りの神である³¹。それは聖書で、異邦の神はみなむなしいが、耶和華は天の作り主だ、と言っているからだと言っている。しかし、中国人キリスト者たちにとっては、このような中国語を

²⁶ JEW, *The Chinese recorder and missionary journal* 1876, July-August. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, P375.

²⁷ 当時の中国語の書き言葉と話し言葉の違いは、説教をする宣教師たちにも気づかれ、宣教師間の議論の一つのテーマになっていた。例えば、John Chalmers, *Chinese and Dead language The Chinese recorder and missionary journal*, 1877. Shanghai: American Presbyterian Mission Press,

²⁸ Eugene A. Nida, Charles R. Taber, Noah S. Brannen 著；沢登春仁、升川潔訳 『翻訳：理論と実際』 研究社、1973 年、154～159 頁

²⁹ 前掲書、155 頁。

³⁰ 前掲書、155-156 頁。

³¹ 「陸佩先生書《圣号定称说》后」、『万国公報』(七)(第 466 卷、1877 年、12 月 1 日)、213 頁。

媒介にしてキリスト教の神を理解する方法しかなかった。

宣教師陸佩一人(理一視という宣教師も登場するが、彼は文章を一つしか投稿していな)だけが登場し、中国人キリスト者たちの反対側で連続して文章を載せているため、この論争では、宣教師たちの意見を直接にうかがうことができない。しかし、中国語での意味を重要視し、中国人たちにより容易にキリスト教の神を理解させるために、「上帝」を使用することを主張した宣教師たちがいたことは、宣教師間の訳語論争から確認することができる。この論争に参加した中国人キリスト者の中にも、宣教師による「上帝」主張を知っていた人がいる。何玉泉はメドハースト(麦都思)とレッグ(理雅各)の名前を直接に指摘しながら彼らの儒学学識を高く評価している³²。特に、何玉泉は「上帝」を主張するに当たりレッグの『儒教とキリスト教の関係』(Confucianism in Relation to Christianity)の中で「新旧約で論じられている上帝は即ち六経で言われている上帝である」³³と言い、それを論拠にする。訳語論争に対する宣教師たちの立場を何玉泉が知ることができたのは、『万国公報』に相関する文章が載せられたからである³⁴。レッグのこの文章は、1877年5月上海にて行われた宣教師大会で読まれたが、宣教師たちの強烈な反対により、会議議事録には記録されなかった文章である³⁵。この文章では何玉泉が言ったように、儒教の「上帝」がキリスト教の神だといっている。

「私が確信していること、すなわち、中国古典の『帝』と『上帝』がゴッド—私たちのゴッド—真のゴッドであることをここで繰り返して言うと、会議のすべてのメンバーたちは私に賛成しないだろう」³⁶。

直接に名前と文章のタイトルまで明確に取り上げたのは、この文章に限るが、そのほかでも宣教師の主張と類似した論拠を上げる箇所がところどころに見える。レッグの論点に根拠を置くこの論とつながるが、このような「上帝」理解は、儒教の初期古典に限定されるということである。1870年代当時の人たちが理解していた「上帝」ではなく、秦の火により一回その原本が完璧に復元できなくなった儒教古典に書かれた「上帝」である。

「悲しいな、後の世代は古道を奉じなくなった。それに古典が削られ、秦の火に燃やされ、天道の学がほとんど伝えられなくなっただけでなく…」³⁷。

³² 何玉泉、「续『天道合参』」『万国公報』(七)(第467巻, 1877年、12月8日), 227頁。

³³ 前掲文章、226頁。

³⁴ 同上。

³⁵ *Confucianism in relation to Christianity* / by James Legge -- Kelly & Walsh, 1877.P.3.

³⁶ *Confucianism in relation to Christianity* / by James Legge -- Kelly & Walsh, 1877.P.3.

³⁷ 鹭江氏、「天道探本」『万国公報』(八)(第478巻, 1878年、3月2日), 382頁。

儒教古典のこのような事情は、キリスト教と関係なしに中国歴史上の出来事である。しかし、レッジは *The notions of the Chinese concerning God and spirits* の中で、北宋の時期に書かれた唐朝の歴史書である『新唐書』に記載された内容を引用しながら、キリスト教の神と同じ「上帝」が、秦の火に書物が焼かれたことを経て、「上帝」概念が正確に伝わらなくなったことを語っている³⁸。上記の文章の著者である鷺江氏は、直接にレッジの名前かレッジの文章を取り上げない。しかし何玉泉が言うように、『万国公報』に宣教師たちの書いた文章が載せられたため、そのような文章を通して宣教師たちの主張に断片的に触れたと推測できる。『万国公報』は中国語雑誌であるため、英語を知らない中国人でも読むことができるからである。

中国人キリスト者たちは、「上帝」の主張の根拠をパウロの言葉「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました」に求めたり³⁹、さまざまに取り上げてはいるが、六経の上帝を通してキリスト教の神を理解しようとしたのが特徴的である。

鷺江氏の文章を挙げてみると、彼は全世界の人類が同じところから出たという。

「宇宙は広いが、だれでもアダムの子孫であり、洪水以来はどの国もノアの後代である」⁴⁰。

それ故、中国人も西洋のキリスト教徒もともに同じ唯一の最高者を知っていると言う。

「言葉は違うけれど、心の中で[その神が]上にいる唯一の最高者であり、形はないが永遠に存在する方であることをわかる」⁴¹。

このような言い方は、その真の理解が破壊される前の、初期の儒教古典の「上帝」を通してキリスト教の神を知っていたと言うのと通じている。即ち、中国語の初期儒教古典に記録された「上帝」がキリスト教の神と異なる、異邦の神、邪悪な神ではなく、聖書で言っているキリスト教の神と同一だと言うことである。このような主張は、「キリスト教の神が最高者である」という特徴への理解と通じるのである。なぜなら、聖書の神が独一无二の存在であり、最高者であるなら、この世界のどこにおいても、その神を最初は知られたはずである。全人類がアダムとエバの子孫であることを認めるなら、即ち聖書の内容を全人類の起源として認めるなら、中国から遡っても、いつかは聖書に出てくる人類の子孫とのつながりが確認

³⁸ James Legge, *The notions of the Chinese concerning God and spirits* Printing at the "Hongkong Register" Off., 1852.P.44~46.

³⁹ 何玉泉, 「天道合参」『万国公報』(七)(第 457 卷, 1877 年、9 月 27 日), 87 頁。聖書引用は使徒言行録 17:26、新共同訳聖書から引用。

⁴⁰ 鷺江氏, 「天道探本」『万国公報』(八)(第 478 卷, 1878 年、3 月 2 日), 382 頁。

⁴¹ 同上。

できないといけない。そこで、少なくともアダムからノアまでは同じ先祖であったことを強調している。彼らが強調しようとしたのは、キリスト教の神のほかにもう一人の最高者がいるのを認めようとするのではない。そうではなく、自分たちが今までもっていた儒教的なものを何とかしてキリスト教の中に含ませて保存しようとするものであったといえよう。なぜなら、このような精神的遺産は、言語のレベルで捨てがたいものであっただけでなく、言葉の意味を超えて、自己アイデンティティーにかかわる大事なものであったからである。

「中国では儒教を重んじ、聖教は儒教の元であり、儒教を超える。土は四民の首であり、もし儒者が平素に読み、士人が心で敬っている『上帝』で導かないと、…」⁴²。

初期の儒教古典の中に出てくる「上帝」が即ちキリスト教の神であることに対して、「上帝」を主張する宣教師と中国人キリスト者たちの間で共通な理解を確認することができる。根拠が非常に限定されるが、レッグの観点を直接に引用した文章が残っている。しかし、両者の目的は大きく異なっていたことも確認することができる。レッグにとってはあくまでも、キリスト教の神を中国人たちにより効率高く伝えるのがその目的だと言えよう。しかしそれに対して、中国人キリスト者は、新しい思想であるキリスト教を受け入ると同時に、自分のアイデンティティーを形成してきた儒教思想を簡単に切り捨てることができず、むしろ何とかして残しておこうとしたのである。

論争文章の多くは、最初から「神」をキリスト教の神の訳語として前提していた陸佩の態度に激しい反応を見せ、時には感情的な表現も見ることができる。ここで、なぜレッグ⁴³もメドハースト⁴⁴も最初は「神」をキリスト教の神の訳語として使用したが、後に「上帝」を使用するようになったのかを、彼らの書いた文章を読まなくても、想像しがたくはない。また 1870 年代の訳語論争の中で、なぜ「宣教現場での経験」を強調したのかをも想像がつくだろう。

中国人キリスト者たちの「上帝」理解、あるいは「キリスト教の神」理解は、キリスト教が入ってしばらくの間は、中国語という限界を超えることができなく、中国語の中で一中国古典へ理解を依拠して一理解しようとしたのである。このような現象は、宣教師たちから見て望ましくないかもしれないが、認めざるを得ないことではないか。

4、終わりに

原文を強調する宣教師と原文に直接アクセスできない中国人キリスト者の間には、問題への認識が最初から一致できなかった。中国人キリスト者たちは、キリスト教の神の一つの特

⁴² 英紹古,「圣号定称说」『万国公報』(七)(第 466 卷, 1877 年、12 月 1 日), 213 頁。

⁴³ 龚道运,《近世基督教和儒教的接触》上海人民出版社, 2009 年, 147 頁。

⁴⁴ 前掲書, 109 頁。

徴である「最高者であり独一無二の存在」から神への理解を始めようとしていた。またこのような理解は、受容者の書き言葉である中国古典の中での理解に依拠しようとした。中国古典がのちになって、その元来の意味が失われたが、もともとの意味からすると、キリスト教の神と同じ存在を六経の上帝が指していることを主張する。このような主張は宣教師と共通する部分があるが、それは宣教師の主張から借りてきた可能性も完全に排除できない。しかし、宣教の目的を達成させることに集中していた宣教師と異なり、中国人キリスト者たちは、このような理解を通して、儒教的なものを残そうとしたのである。これが受容者の主な特徴ではないか。即ち、キリスト教と接する前に持っている、キリスト教からすれば異教的なものを持っている人間である。何千年もその思想で養われてきた古典は、中国人にとっては、簡単にその存在を徹底的に否定できるようなものではなかった。彼らは、何とかして、古典をキリスト教に含ませて理解しようとしたと言えよう。

唯一の最高者とあらゆる崇拝対象を同時に表現する言葉で God にあたる聖書用語を翻訳していた英語圏の宣教師たちは、中国語の場合、その方法が必ずしも絶対的にうまくいく方法ではないことに気づいていた。

訳語論争は、主に宣教師たちの間でなされた論争ではあるが、中国人キリスト者たちの意見に焦点を合わせてみた。このような資料が得られたのは、受容者である中国人キリスト者たちがこの論争へ参加することの重要性を宣教師たちも意識したからである。

中国人キリスト者たちが宣教師と全く新しい意見を出したわけではないが、伝える方である宣教師たちとは異なる背景を持っていた受容者に焦点を合わせてみると、その意見を支えている中国古典の思想がそう簡単には否定できないことを認めざるを得ない。

受容者と受容者の言語、また受容者言語の思想は、神の訳語論争から見ても、非常に重要な要素である。

(Jin Xianghua 京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修)